コンコン
「どうぞ」
伊吹が声をかけるとベルフェゴールがお気に入りの枕を持って現れた。
「こんばんわ」
「こんばんわ」
伊吹とベルフェゴールは早速とばかりにベッドの中に入ると肩を寄せ合った。
「でも珍しいよね。ベルフェが眠れないだなんて」
「そう？」
「だっていつも眠い眠い言っているイメージしかないからさ。なんかちょっと意外」
「たまにはぼくだって眠れないときはあるよ」
「そんなものなのかな？」
「そんなものだよ。伊吹はどうなの？今夜は眠れそう？」
「んー、多分ぼんやりしていたら眠っちゃうと思う」

「そうなんだ。じゃあもし伊吹が先に寝たらぼくは伊吹の寝顔を見ながら眠れるってことだね」
「え？私が先に寝る前提なの？」
「状況的にそんな感じじゃない？」
「残念だなー。ベルフェとはいつも一緒にうたた寝しているのが気持ちいいのに・・・ふぁあ」
伊吹が大あくびをすると、ベルフェゴールは「ほらね？」と言いながら伊吹の額を軽くつついた。
「本当だ。なんか状況的に私の方が先に寝ちゃいそう」
「言ったとおりでしょ？だから今日は伊吹の寝顔を見ながら寝ることになりそうだな。って話しているの。でもね、伊吹がちょっと協力してくれればぼくはすぐ寝ることができる」
「協力？もしかして子守歌とか？」
「違う違う。セックスしてくれたらすぐ眠れる」

「は？」
ベルフェゴールは伊吹の体の上に覆いかぶさると額に軽く口づけをした。
「なんかイっちゃうと凄く眠れるようになるんだよ。だから、伊吹が協力してくれたら一緒に眠れるかな？」
「はぁ・・・」
「嫌なの？」
「いや、嫌ってわけじゃないけど、セックスで眠れるようになるっていうの私もそうだからちょっとびっくりしちゃっただけ」
「じゃあちょうどいいじゃない。一緒に寝れるようになろうよ」
ベルフェゴールは伊吹の体に抱きつくと甘えるような仕草をした。
「もう・・・ベルフェはいつもそんな風に甘えてくるんだから・・・」
「悪い？伊吹だってぼくが甘えるのそんなに悪い気はしていないでしょ？」
「まあね」
「なら良いじゃない。セックスさせて」

「もう」
あきれたようにつぶやくと、伊吹は両眼を閉じて少しあごを上げることで性行為に同意するという意思を示した。
ベルフェゴールの唇が伊吹の唇に重なる。
軽く何回か唇が重なった後、ベルフェゴールは伊吹を見下ろしながら嬉し気に微笑んだ。
「どうしたの？」
「ん？伊吹とセックスできるのがすごく嬉しいなと思って」
「そう」
「伊吹はぼくとセックスするの嬉しくないの？」
ベルフェゴールに言われ伊吹は少し考えた。
「嬉しいというか・・・そんなに特別じゃない感？」
「なにそれ？伊吹はぼくみたいに嬉しいって思わないの？」

「え？・・・もしかしたら男女での感情の違い？なんて言うかセックスに対する重要度の・・・痛い！」
ベルフェゴールは伊吹の首元に少し強めに噛みついた。
「痛いよベルフェ」
「ぼくがこんなに伊吹とするの嬉しいと思っているのに、伊吹がそう思っていないのがちょっと悔しい」
「だって・・・」
「だってじゃないよ。今日は井吹にちょっとお仕置き！」
「え？お仕置きって何をするの？」
ベルフェゴールは伊吹のパジャマのボタンを外すと乳首に歯を立てた。
「痛い！」
「だから言ったでしょ？お仕置きだ。って」
「んもう・・・ベルフェひどいよ」

ベルフェゴールは気が済んだのかそれ以降はいつものように伊吹が心地よくなるように愛撫をした。
ベルフェゴールの手は流れるように伊吹のパジャマを脱がせあっという間に裸にし、自らも流れるような手つきで裸になった。
「伊吹」
ベルフェゴールの唇が顔を始めとしたあらゆるところに落とされる。